ひよくれんり６

もくじ

ひよくれんり6 5

プロローグ　〜私のやる気スイッチ〜 6

優月と赤ちゃん言葉 11

みんなでハロウィン 42

二人が結婚した理由 63

ドングリとクッキー 88

サンタさんのプレゼント 102

優月からのプレゼント 112

賑(にぎ)やか楽しいお正月 143

みんなで新年会 163

優月の初恋 187

優月と子犬 202

家族の在(あ)り方 216

エピローグ　〜過ぎたるは猶及(なおおよ)ばざるが如(ごと)し〜 248

番外編　おいしいごはん 271

お米パーティー！ 272

味見と盗み食いは別物です！ 282

甘いドーナツと…… 289

ひよくれんり6

プロローグ　～私のやる気スイッチ～

学生の頃や、学校を卒業して書店で働いていた頃。気力が湧かなくて怠けたい気持ちになった時に、よく「誰か私のやる気スイッチ押して～」と、言っていた。

やる気スイッチとは何かというと、自分の背中にある、自分では押せないスイッチ。それを誰かに押してもらえば、みるみるやる気になって、勉強も仕事も頑張れる！　そんな想像をしていた。

だけど、本当はそんなスイッチは背中についていない。ただ「自分がやる気になれないのはスイッチが入っていないからだ」って、言い訳していただけだった。

それに「誰かが押してくれたらやる気になるよ」なんて、他力本願もいいところだよね。

でも最近は、やる気スイッチは本当にあるなって思うんだ。

私の場合、これを押してくれるのは愛する家族――優しい旦那様と、可愛い息子。

二人が「美味しい」って言ってくれるから料理が楽しい。それに、結婚前は面倒だな、苦手だなって思っていた掃除や洗濯だって、家族のためだと思うと続けられる。

そりゃあ、ずーっとやる気に満ちているわけじゃないし、時には疲れて怠けたくなる時もある。けど、そんな時にはちょっと休んで家族のことを考えると、再びやる気スイッチが入っちゃう。

奥さんとして、お母さんとして、「よし！　また頑張るぞ！」って、思えるんだ。

そんな私こと柏木千鶴（旧姓は峰岸です）は、三十五歳の主婦です。結婚して以来ずっと専業主婦だったけど、最近知り合いが始めたカフェで働き始めました。なので、今は兼業主婦をやっています。

旦那様の柏木正宗さんとは、二十八歳の時にお見合いで知り合い、結婚しました。

正宗さんは私立高校で日本史を教えている、眼鏡の似合うイケメン教師。弓道部の顧問でもあります。性格は穏やかで優しくって、本当、私なんかにはもったいなさすぎる旦那様ですよ。

対する私は平々凡々。特筆することといったら、食い意地が張っていることと、あとは……ＢＬ作品が大好きな腐女子ってこと……かな。ええ、男と男の恋愛が大好物ですよ！

結婚当初は隠していた趣味ですが、すぐに正宗さんにバレてしまい、現在は生温かく見守られています……（それはそれで、とっても気まずいんだけど！）

身長は百五十二センチで、胸は……ささやか。せめてもう一つ大きいサイズになりたかった……！

母親譲りの少し色素の薄い髪は、いつも肩上くらいでキープ。伸ばそうと頑張っていた時期もあったけど、なんだかんだ今の髪型が一番気に入っています。

そんな私達の間に生まれたひとり息子は優月。幼稚園の年中さんです。

名前の由来は、月がとても綺麗な夜に生まれたから、あと、この子を生む時にとてもお世話に

なった人の名前から一字を貰い、「優しい人になりますように」という願いを込めて、この名前を付けたのです。

見た目は私より正宗さんに似ていて、サラサラの黒髪で、将来が楽しみな顔をしています。親の贔屓目もあるかもしれませんが、すごく可愛い子です。

性格は私の方に似ちゃって食いしん坊ですが、名前に込めた願いの通り、優しい子に育っています。自慢の息子です！

家族のために料理を作り、お掃除と洗濯。

家事をしながら優月を育てて、家庭菜園のお世話もします。

そんな日常が少しだけ変わったのは、今年の九月から。

私の知り合い——お隣の立花家の奥さん、志乃さんが開いたカフェで働かせてもらうようになったのだ。

ずっと専業主婦だった私が働きたいと言った時、正宗さんは反対した。

その理由は、優月はまだ小さいし、私が働き始めたら、家族で過ごす時間が減ってしまうんじゃないかということ。それに、家のことをしながら仕事をするのは大変だって。

頭ごなしに反対されて、私もかっとなり、正宗さんと喧嘩をしてしまった。

あの時のことを思うと、今でもちょっと胸が苦しくなる。自分の気持ちをわかってもらえないのが悲しくて、寂しかった。それから、感情的になって酷いことを言ったり、態度が悪かったりした

自分が申し訳なくて……

ああでも、ちゃんと仲直りできました。二人で腹を割って話して、かえって喧嘩をする前よりもお互いのことをわかり合えた気がします。現在は正宗さんも私が働くことを応援し、協力してくれているのです。ありがたい。

家族だけじゃなくて、志乃さんや他のスタッフさん達にもすごくお世話になっている。

優月の幼稚園のお迎えに間に合うようにと、仕事は二時で上がらせてもらっています。その上、シフトに入るのは平日だけで、土日は家族と過ごす時間をとれている。本当にありがたい。

お世話になっている志乃さんの役に立ちたいって思うし、仲良しのスタッフさん達と一緒に働くのは楽しい。それに、お店に来てくれるお客さん達の笑顔を見ると、この仕事を選んでよかったなって思える。結婚前に働いていた、本屋さんでの接客経験が活かせたのも嬉しかった。

昔はしょっちゅう「働きたくないでござる～」なんて、冗談めかして弱音を吐いていたのにね。

こんな日が来るとは、当時の自分は想像もしなかったんじゃないかな？

今まで家事だけをやっていたところに、外での仕事が増えたのは、確かに忙しくて大変。

けれど、とってもやりがいを感じるし、幸せだと思う。

私がこんな風に楽しく働けるのも、家族の応援と協力、それから職場の人の理解があるおかげ。

だから私も頑張らなきゃ！　って思うし、頑張らなくちゃいけない。

これまで私のやる気スイッチを押してくれていたのは、家族だけだった。

そこに一緒に働く人達やお店のお客さん達が加わって、私はますますパワーアップしたような、そんな気持ちでいる。

もう誰かに「やる気スイッチを押して〜」なんて、泣き言を言うことはないだろう。

だって私は今、こんなにもやる気満々なんだから！

優月と赤ちゃん言葉

十月のある日の朝。朝の準備を終えた優月が、私に声をかけてきました。

「おかあしゃーん。よういできまちた〜！」

「むむっ！」

幼稚園の制服を着て、帽子もばっちり被り、鞄（かばん）を斜めにかけて準備オッケイ！　な優月。

先月誕生日を迎え、五歳になったこの子は最近、あることにハマっております。

それは……

「ようちえんいきまちゅ〜」

赤ちゃん言葉、なのです。

以前はたどたどしいながらも普通に話していたのに、面白がってわざと赤ちゃん言葉を使うようになったのだ。

「こーら！　赤ちゃん言葉はもう終わりでしょう？」

「へへ〜。ごめんなちゃいっ」

「優月！」

「きゃは〜」

真剣な顔で怒ってみるものの、優月はその反応に、さらにきゃっきゃと笑う始末。
親としては、ちゃんとした言葉で話してほしいんだけどなあ。
それに、私が怒っても効果がないって、ちょっとへこむわぁ……
うん。そこが一番しんどいのかも。
子育てって、なかなか思い通りにはいかなくて難しい。それが当たり前なのかもしれないけど。
そんなことを考えながら、私は優月を自転車のチャイルドシートに乗せ、幼稚園まで送っていった。
いつもは正宗さんが通勤前に車で送っていきます。ですが、今日は朝から職員会議があっていつもより出勤時間が早く、代わりに私が送っていくことになったのです。
「あ、けんじくんだ！」
幼稚園に着くと、優月は仲の良いお友達の姿を見つけ、自転車から降りて駆け寄ります。
うーん、微笑ましいねぇ。
お友達の前では恥ずかしがって、普通に喋るかと思いきや……
「おはようでちゅ～！」
「おはようでちゅ！」
けんじくん、お前もか！
「はあ～」
楽しそうに赤ちゃん言葉で話す二人を見て、思わずため息が零れる。

幼稚園ではけんじくんの他にも、赤ちゃん言葉を使っている子がちらほらといた。流行っているのか幼稚園で！
他のママさん達は、「いずれ飽きるわよ～」とおおらかに笑っているけれど……
（……私が気にしすぎなのかなぁ……）
そんな引っかかりを覚えつつ、私は出勤した。
私の職場――町内の外れにある平屋の日本家屋を改装したカフェ『たちばな』は、先月オープンしたばかり。ここのオーナー兼店長は、我が家のお隣、立花家の奥さんの志乃さん。
一緒に働いているのは、志乃さんのお友達でパティシエの高野緑さん。緑さんは主にお菓子作りを担当しています。それからもう二人、フロアを担当するアルバイトスタッフさんがいる。
お店の定休日は毎週火曜日。火曜日が祝日だった場合、翌日がお休みになります。営業時間は午前十時から夜の七時まで。私達スタッフは九時から五時までの早番と、十二時から閉店後の作業が終わる八時までの遅番に分かれ、シフトを調整しながらお店を回している。
元の日本家屋の風情を活かした和風のカフェ『たちばな』は、有機野菜を使った料理と、こだわりのブレンドコーヒーが自慢のお店です！　野菜は志乃さんの知り合いの農家さんから仕入れている他に、お店の裏庭に作った畑で収穫されたものも使用。畑ではハーブも育てています。
最近は口コミでちょっとずつ評判が広がって、お客さんも増えてきた。
「おはようございまーす！」
「おはよう、千鶴ちゃん」

八時半くらいに店の裏口から入ると、すでに志乃さんがエプロンを着けて仕込み作業を始めていた。志乃さんはいつも早めに来て、裏庭の畑のお世話をしてから仕込み作業に入るんだよね。私も急いで着替えなくっちゃ！

今日のシフトでは、早番は志乃さんと私だけ。十二時からは、遅番の緑さんとアルバイトスタッフの安東香織ちゃんが入る。香織ちゃんはこのお店で一番若い、ぴっちぴちの二十二歳だ（と言ったら香織ちゃんに笑われたけど）。将来カフェを開くのが夢だそうで、ここで働くのはそのための修業なんだって。

お店にはスタッフのロッカーを置いた小さい更衣室があり、そこで制服に着替える。『たちばな』の制服は、白いシャツに黒のパンツ。それからワインレッド地に白のストライプが入った胸当てエプロンを着けて、それとお揃いのハンチング帽を被る。オープン前にたくさんの候補の中から決めたこの制服は、私達のお気に入りだ。

「よしっ」

着替えを終えたら、まずはお掃除。

「掃除入りまーす」

「はーい。よろしくね」

厨房の志乃さんに声をかけて、駐車場と店内の掃除をする。

駐車場やお店周りは箒で落ち葉や土埃を掃いて、ゴミが落ちていたら拾う。そして、プランターのお花や庭木に水を撒くのも朝の仕事だ。

お次は店内に入って、床をモップがけする。改装された店の床は、落ち着いた色合いのフローリング。それとは別に、和室をそのまま使った座敷席もある。

テーブル席は、遅番の人達が閉店後に椅子をテーブルの上に上げているので、すぐにモップがけができる。

それが終わったら、今度は座敷席の畳を固く絞った雑巾で拭き掃除。フロアも座敷も、閉店後に掃除機をかけているから、朝はモップがけと拭き掃除だけでいいのだ。

あとは座敷席に座布団を敷いて、フロアのテーブルから椅子を下ろしてきちんと並べ、それぞれのテーブルを拭いて終わり！　そうそう、テーブルの上の小物を整えたり、店内の観葉植物にお水をやったりするのも忘れない。

最後にトイレをチェック。トイレ掃除は閉店後にしっかりやってもらっているので、チェックといっても、埃が目につくようならそこだけちょちょいっと掃除するくらいかなあ。あ、天気の良い日はトイレの小窓を開けて換気しておきます。

掃除が終わったら、念入りに手を洗って厨房で仕込みのお手伝い。

ここで志乃さんから今日の日替わりメニューのことを聞いたりと、簡単な打ち合わせも兼ねている。

時間のかかる仕込みは前日の夕方からしているので、開店前にするのはスープ作りと炊飯、それからサラダの準備かな。そのメニューによって変わるけど。

「今日は良い蓮根が入ったから、日替わりメニューのスープは蓮根のポタージュよ」

「わあ！　美味しそうですね～！」
志乃さんの言葉に、ついはしゃいだ声を上げてしまった。
日替わりメニューは、その日手に入る食材を見て、志乃さんが考えている。
蓮根のポタージュかぁ……。想像するだけで美味しそう……とうっとりしていたら、志乃さんがクスッと笑い、「今日の賄いで食べていいわよ」と言ってくれた。
そうそう、ここでは昼と夜に賄いが出るのですよ～。美味しいご飯が食べられると思うと、余計に張り切っちゃうよね！
「ありがとうございます！」
今日の賄いご飯も、とっても楽しみだ！

開店時間の十時少し前。私は今日の日替わりメニューを書いたブラックボードを、お店の入り口近くに出し、店内の有線放送のスイッチを入れた。するとスピーカーから、耳に心地良い音楽が流れ出す。
「オープンしまーす」
「はーい」
時計の針が十時を指したら、厨房の志乃さんに声をかける。
ここからは、私がフロア担当で志乃さんは厨房担当。私は接客をし、志乃さんが作った料理をお客さんのもとに運ぶ。注文を取るのも料理を運ぶのも、始めたばかりの頃は緊張して戸惑ってばかりだったけど、最近はようやく板についてきた。
開店直後の時間帯は、ブランチを食べに来る人や、静かにコーヒーを楽しむお客さんが多くて、まったりと時間が流れていく。時々ご近所さんが来店して、志乃さんも交えて世間話をしたり……なんてこともある。
このお店は、ご近所さんの憩いの場になっているのだ。今までそういうお店、この辺になかったからね。
それがちょっと忙しくなるのはお昼時から。だけど、十二時になると緑さんと香織ちゃんも入るので、早番の私と志乃さんは、一時から三十分間の昼休憩をとる。更衣室の隣の和室が休憩室になっていて、ここの卓袱台で賄いを食べるのだ。
今はまだ、目が回るほど忙しい……！　というほどではないから、二人で休憩に入れる。でも、この先もっと忙しくなったら、休憩に入る人数や時間を調整しないといけないかもしれないと、志乃さんは言っていた。
今日の賄いは、ランチプレートに出している和風ハンバーグと大根サラダ、それに蓮根のポタージュと五穀米だ。『たちばな』で出しているご飯は、白ご飯と五穀米の二種類で、お客さんが選べるようになっている。ちなみにどちらも、志乃さんのご実家で作っているお米を使っています。
こんなに美味しいご飯をいただいた上にお給料も貰えるなんて、本当にありがたい。
「今日も美味しいですうう……！」
「あはは、ありがとう。千鶴ちゃんって本当に美味しそうに食べてくれるから、作り甲斐があ

るわ」
お昼休憩中、賄いを食べつつ感動する私に、笑顔でそう仰る志乃さん。女神か。
美味しいご飯を堪能しながら、私達はお喋りも楽しむ。
「……それで、うちの子、相変わらず赤ちゃん言葉を使っているんですよ」
高校生の娘さんがいて、育児の大先輩でもある志乃さんに、優月の赤ちゃん言葉について話してみた。
怒っても全然直さないし、舐められてるのかなあと呟くと、志乃さんは「あんまり気にしすぎない方がいいわよ」と言った。
「優月ちゃんはまだ小さいんだから、可愛いもんじゃない」
「ですかねぇ……。そういえば、志乃さんのところの千代ちゃんは優月のくらいの歳の時、どうでした？」
志乃さんの娘さん——千代ちゃんは時々、このお店の手伝いをしてくれる。
小学生の頃は、よく幼馴染の宗憲くんと、うちにおやつを食べに来たんだよね～。
「うーん……。うちの子はそういうの、あんまりなかったわねぇ……」
「そうだったんですか……」
「まあまあ。子どもの成長って、ほんとそれぞれ違うものよ。ついつい周りと比べたり、自分の思っていた通りにならなくて落ち込んだりするけれど、気にすることはないわ」
「はい」

大先輩のお言葉は説得力があって、すとんと胸に落ちてくる。
そうだよね、あんまり気にしすぎるのはよくないか。

それから数日後の土曜日の朝。
幼稚園と私の仕事はお休みだけど、正宗さんは弓道部の練習のため、出勤です。
なので、玄関先で二人で正宗さんをお見送りすることに。そこで私は、隣に立つ優月に言い聞かせる。
「いーい？　ちゃんと『いってらっしゃい』って言うんだよ」
「はーい」
「『いってらっちゃい』はだめだからね？」
「はーい！」
……返事だけはいいんだよね、この子。
優月は、相変わらず赤ちゃん言葉を使い続けている。その都度直すように言うんだけど、ちっとも聞きやしない。
そんな私達のやり取りを、玄関の土間に立つ正宗さんは微笑ましそうに見守っていた。
「はは。それじゃあ、行ってきます」
「はい。いってらっしゃい」
「おとーしゃん、いってらっちゃーいっ！」

「あっ、また！　こらー!!」
さっきは言わないって返事をしたのに、わざとふざけるんだから。
しかも言い逃げとばかり、逃げ足が超速い優月は、あっという間に家の奥に逃亡してしまった。
くそう……
「ごめんなさい正宗さん。最近はずっとあんな調子で……」
私はしょんぼりと、正宗さんに頭を下げる。
親の……っていうか、私の言うことなんてちっとも聞いてくれない優月。
あんまり気にするのはよくないと思っていたのに、反抗期なのかなぁと不安になっちゃう。今からこんな調子で、この子が本格的な反抗期を迎えた時、私はちゃんと向き合えるのだろうか……
「そんなに落ち込まないでください、千鶴さん。今は面白がっているようですが、きっとすぐに飽きますよ」
「そうかなあ……」
正宗さんの言葉にも、なかなか頷けないのです。
このままエスカレートして、先生や大人が話している途中でふざけたり、授業中に教室を飛び出したりしちゃう子に育ったらどうしよう……。『学級崩壊』や『問題児』の文字が頭を過り、私は不安になる。
たかが赤ちゃん言葉、されど赤ちゃん言葉……うむううう……
「俺からも話してみますから」

「うう……。すみません」
確かに、ここは父親である正宗さんにびしっと！　言ってもらった方が効くのかも……
「では、いってきま……あ、千鶴さん」
「はい？」
どうしたんだろう？　何か言い忘れたことでも？
「いってきま――」
途中まで言葉を紡いだ正宗さんの唇が、ちゅ……と私の唇に触れた。
「ふぇ!?」
い、いいいいいい今！
ちゅー！　ちゅーされた、ちゅー!!
しししかも！　これ、い、いってきま……ちゅって！　いってきまちゅ!?
なんだこれ！　照れる！　超照れる!!
ただ「いってきます」のキスをされるより、照れるんですけどおおお!!
動揺する私を見て、正宗さんは「いたずら成功」みたいな笑みを浮かべていらっしゃるし！
「……続きは夜に」
きゃあああああ!!
私の唇を指の腹で撫でてから、正宗さんはそう囁いて、玄関を出ていった。
ふあ……、どうしよう、朝からすごいドキドキしちゃったよ……

結婚して大分経つけれど、正宗さんはいまだに、こうしてすんごい爆弾を落とす。
こういう時、私は一生正宗さんにドキドキさせられるんじゃないかなって思ってしまう。
「おかあしゃん」
はっ！
気付けば優月が、柱の向こうから顔を半分出して、こちらを見ているではありませんか！
しかも、めっちゃにやにやしてるし！
ま、まさか、さっきの「ちゅー」を見られた？　見られた!?
え、ええい落ち付け。落ち着け千鶴！　親の威厳を取り戻せ!!
「どっ、どうしたの？」
私は努めて冷静な顔を作り、優月と向き合う。
「んふー」
なっ、なんなのよ、その満面の笑みは！
もしや、「ちゅーしてたね～、ちゅー！」って、囃したてる気か？　もしくはご近所中に言い触らすつもりか……？「おとうさんとおかあさん、ちゅーしてたんだよ！」って!!
それはやめてえええええええ!!　恥ずかしくて外を歩けなくなるわ!!
「あのねえ……」
「……」
笑顔のまま口を開く優月を見つめ、私は息を呑む。だけど――

「おなかちゅいたの」
「えっ」
なんだそれ……と脱力する。
もしかして、さっきのちゅーは見られていなかったということかな。
っていうか私、考えが飛躍しすぎだよ！　恥ずかしいいいいいい!!
「おやちゅ、おやちゅ～」
親の気持ちなんて気にもせず、優月は恥ずかしさに悶絶する私におやつを要求する。
ついさっき、朝食を食べたじゃないのよ……
「だーめ。ご飯食べたばっかりでしょう」
「ええ～、ちょっとだけっ！　おねがいでちゅ～」
優月は諦めずに、ちょっとだけでいいから～とおねだりしてくる。
「……じゃあ、ちゃんと『おやつください』って言えたらいいよ」
赤ちゃん言葉じゃなくってね、と私は付け足す。すると優月はぱあっと満面の笑みを浮かべて、
「おやつください！」と言った。ちょろいな！
「よし！　じゃあ、ビスケット出してあげるね。ご飯のあとだから、少しだけだよ？」
「やった～！」
優月は私にぎゅーっと抱きついて、「ありがとうございます！」とお礼を言う。
もう、食べ物が絡むと素直なんだもんなあ。あんなに言っても直らなかったのに、おやつのため

ならあっさりなんだから。
我が子の現金さに、つい笑ってしまう。
誰に似たのかしら、この食い意地……って、確実に私ですね、すみません！

そんなこんなで、優月の面倒を見つつ家事に奮闘していたら、あっという間に夜になった。
仕事がある日はできない分を、休みの日に纏めてやっちゃうからね。一日がかりになるのですよ。
ちなみに、休日出勤だった正宗さんはお昼過ぎに帰ってきたので、そこからは正宗さんに優月を見てもらいました。正宗さんがいる間も、相変わらず赤ちゃん言葉ブームは続いていたみたい。お父さんが注意するとその場では直して、でもしばらく経ってからまた使う……という感じでした。特に私に対してよく使うのは、やっぱり私が舐められているからだろうか……
そして、夜にはいつも通り正宗さんが優月と一緒にお風呂に入って、優月は先に就寝。後からお風呂に入った私が、裸にバスタオルを巻いた恰好で自分の部屋に向かう。
我が家の二階には部屋が三室ある。一部屋は私の自室で、真ん中の一部屋は正宗さんの書斎、残る一番大きな部屋を家族の寝室として使っているのだ。
寝室には優月が寝ていますからね。その……正宗さんとセ、セックスするのは、もっぱら私の部屋で……なのですよ。
襖をそっと開けると、正宗さんはいつもと同じく浴衣姿で、長座布団の上に座って文庫本を読んでいた。この間、一緒に本屋さんに行った時に買っていた新刊だ。私も気になっていて、読み終

わったら貸してもらう約束をしている。
「千鶴さん」
正宗さんは私に気付くと、微笑を浮かべておいでおいでと手招きをし、自分の膝を叩く。
ここに座りなさい、ってことなんだろう。
十月に入って夜は冷えるようになったので、お風呂上がりとはいえちょっと肌寒い。なので、私は温もりを求め、正宗さんの膝の上に向き合う姿勢で座った。
そうすると、正宗さんがぎゅっと抱き締めてくれる。えへへ、あったかい。
すぐに脱ぐからって、裸にバスタオル一枚なのもそろそろ考えないとなぁ……
そんなことを思っていたら、正宗さんは私の髪を撫でながら「まだ濡れてますね」と言った。
「あ……」
えっと、お風呂上がりに洗面所でドライヤーを使ってきたんだけど、その……
は、早く正宗さんのところに行きたいなー、なんてね。気が急いて、ちゃちゃっと済ませてきちゃったから……だから半乾きなのです……！
だって早くぎゅってしてもらいたくて！　とはとても言えず、言葉に詰まる。
だけど正宗さんは全てお見通しのようで、苦笑しつつ口を開いた。
「急いできてくれたんですね。嬉しいですが、千鶴さんが風邪を引いたら困ります」
「あっ……」
ちゅっ、と私の頭に正宗さんのキスが落ちる。

ふふ……っ、なんだかこそばゆい。
お風呂上がりだから、私の身体は今シャンプーとボディソープの匂いがするだろう。それは正宗さんも同じで、浴衣越しに香る匂いに、うっとりと目を細めてしまう。
「……今日は随分甘えたさんですね」
すりすりと正宗さんの胸にすり寄っていたら、そんなことを言われた。
「んー、ちょっと疲れているのかもしれません」
カフェのお仕事には、最近ようやく慣れてきた。だけど、七年ぶりに働き始めた身体は、まだ家事と仕事の両立についていけていない気がする。
だから、こうしてリラックスするうちに、正宗さんに思いっきり甘えたい気分になってしまった。心が充電を求めているのですよ。ぎぶみー正宗さん！　です。
私の頭を撫でつつ、正宗さんがふと呟く。
「……もしかしたら優月も、あの喋り方で千鶴さんに甘えているのかもしれませんね」
「優月が……？」
そうなのかな……？
「たぶん。ああやって赤ちゃんみたいに甘えて、千鶴さんの気を引きたいだけなのかもしれませんよ」
「そっかぁ……」
優月は、まだ五歳になったばっかりだもんね。

そりゃあ、お母さんに甘えたくなったりもするか……
なのに私ったら、ちっとも言うことを聞かない！　って怒るだけで……。うん、ちょっと反省です。
「明日は思いっきり、優月を甘やかしてあげようと思います」
赤ちゃん言葉にも目を瞑ろう！　思いっきりぎゅーってしてあげよう！
私は、正宗さんにぎゅーされながら、そう心に決めた。
「俺もそうします。……でも今は、千鶴さんを甘やかしたいです。いいですか？」
「は、はい……」
も、もちろんでございます……！
「正宗さん。朝の『いってきま……ちゅっ』の続きを、してほしいです」
小声で囁いたら、正宗さんは笑みを深めて頷いた。
そうして、私の唇にちゅっと、啄ばむようなキスをしてくれる。
「……ふふっ」
わざと音を立ててされたキスはくすぐったくて、ついクスクスと笑ってしまう。
なんだか正宗さんにじゃれつかれているみたいに思えて、心もこそばゆくなるのだ。でも、嬉しい。
そのキスは、私の額、頬、首筋、胸元に順番に落ちて……
「あ……っ」

ふいに、正宗さんの手が、私の身体に巻かれているバスタオルにかかった。
はらりとタオルをとられ、ゆっくりと長座布団の上に押し倒される。
「んんっ……」
正宗さんは私の上に覆い被さると、キスをしながら片手で胸を掬い上げるように揉みしだき始めた。
「はあ……っ、ん……」
最初は唇を触れ合わせるだけだった口付けは、舌を絡め合う深いものに、徐々に変わっていく。
角度を変えるたびに熱い息が零れて、溢れそうになる唾液は彼の舌が絡め取った。お互いのそれが混じり合ったものを、時折こくんと嚥下する。
「……んっ、く……」
私は、湯冷めしそうになっていた肌が、内側から熱くなっていくのを感じていた。
やわやわと胸全体を揉むだけだった正宗さんの指先は、頂をくりくりと弄り始める。そうされると、身体がびくっと震えて、奥がきゅんとする……、私は身をよじりながら、もじもじと太股を擦り合わせた。
「……っぁ……」
正宗さんのもう片手が、私の太股やお腹を撫で始める。
「やぁ……っ」
ただ触れられているだけなのにどうしようもなく感じてしまって、私は熱に潤む瞳で正宗さんを見上げた。
「……」
正宗さんは、甘く蕩けるような赤面もののお顔で、私を見つめている。
何も言わなくても、視線で「愛おしい」と囁かれているみたいで……だ、だめだ、キュン死してしまいそうです。
「……もっと」
正宗さんの麗しいお顔を直視できず、私はきゅっと目を瞑ってさらにキスをねだる。
キスに夢中になって蕩けているうちに、この恥ずかしさも何もかも、快楽と混ざり合って溶けてしまえばいい。
「……はい」
優しくて甘い旦那様は、そんな私の願いに応えてくれる。
唇が腫れてしまうんじゃないかと思うくらい、たくさんのキス。その間ゆっくり高められていた私の身体は、すっかり解されていた。
「や……あっ、ああっ……」
それまでの優しい愛撫から一転。正宗さんは濡れそぼった私の秘所に指を挿し入れると、激しく、ナカの滴を掻き回すように指を動かし始めた。
くちゅっ、ぐちゅっと、いやらしい音が耳を打つ。
そうやって私を攻める正宗さんの息も、荒くなっていく。興奮してくれているんだと思えば、余

計に気が昂ぶった。
「……あっ、だめ……っ、も……イッちゃ……んんっ！」
私は正宗さんの首に両手を回し、しがみつくように抱きついて、最初の絶頂を迎えた。
はあ、はあと乱れた息が零れる。
身体が熱い。汗が出ている……
でも、足りない。まだまだ、甘え足りないのだ。
私はのそりと身を起こして、下着越しに正宗さん自身に触れた。彼は私の意図を察してか、長座布団の上にあぐらをかいて座る。
はあ……。相変わらず、ため息がでるくらい乱れた浴衣が色っぽい。垂涎モノですよ。
身体に燻る熱に浮かされている私は、正宗さんの股間にゆっくりと顔を近付けた。
「んっ……」
鼻先で撫でるようにすりすりする。硬く隆起しているソレが、とっても愛おしく感じられた。
ちょっと躊躇ってから、私は下着越しにぺろりと舌を這わせる。頭上で正宗さんがぎょっとする気配がしたけど、私はそのままぺろぺろと舌を動かした。
私の唾液で湿った布越しに感じる、彼の匂い……って、変態くさいな私！
「……千鶴さん……っ」
「んー」
もうそろそろ、いいかな。

正宗さんの下着をずらすと、硬く聳えるソレが顔を覗かせる。
わーお。何度見ても凶悪なお顔です。
でも、これが可愛く思えるんだから、不思議だよなぁ……
やっぱり愛情故、ですかね。
「んんっ」
両手で正宗さん自身を固定しながら、ぺろぺろ、ちろちろと舌で愛撫する。
正宗さんはいつの間にか私の頭を押さえて、唇から艶めかしい吐息を漏らした。
そうされると、なんだか無理やり舐めさせられているような気になって、ちょっと興奮……してしまうのは、私にM ッ気があるからなんでしょうか。
でもさ、それとは別に、正宗さんが感じてくれているんだと思うと、もっとしたくなるんだよね。
裏筋をつつうっと舌先でなぞり、時折先端をぱくっと咥え、舌の腹でねっとりと舐め上げる。
主にBL漫画の濡れ場から知識を得て、正宗さんとの睦み合いで実践しているテクニックだ。
自分がちゃんと上手にやれているのか、いまいち自信はないけれど、とりあえず感じてくれている様子なので、よしとしよう。
「千鶴さん……っ、もう……」
「……んむっ」
もうちょっと触れていたかったものの、正宗さんに促され、素直に顔を上げる。
正宗さんは困ったような顔で私の唇を拭ってから、テーブルの上に置いていたコンドームの封を

切り、慣れた手つきで自身に被せる。
それを待って、私はあぐらをかいたままの正宗さんと向かい合う体勢でゆっくり腰を落とした。
「はあ……んっ」
ずぶずぶと、正宗さん自身が私に突き刺さっていく。この瞬間は、いつも少しだけ苦しい。
けれど同じくらい、嬉しくてたまらなかった。
奥まで繋がり合い、はああっと深く息を吐いた私は、正宗さんにぎゅうっとしがみつく。身じろぐだけでも、内側が刺激されて快感が走る。
「……今日は、随分積極的なんですね」
自分から咥えて、跨るなんて……と、私の痴態を正宗さんが微かに笑う。
だってなんだか、そういう気分だったんだもん。
正宗さんが欲しくてたまらない。そんな夜もある。
「……こ……いうの、いや……ですか……っ？」
正宗さんをナカに沈めたまま、私は震える声で彼に問いかけた。
「そんなわけないじゃないですか」
大歓迎ですよ……と、耳元に熱く囁かれ、同時に下から激しく突き上げられる。
「ひゃあ……っ」
やばい！　声出る！　優月が起きちゃう……
私はとっさに唇を噛み、声を上げないよう頑張った。

「んっ、んんー！」
緩急をつけて腰を動かされ、お互いの肌がぱちぱちっと触れ合う音が響く。
正宗さんの肩にしがみついていた私は、そのうち彼に顎をとられ、キスをしながら繋がり合うことになった。
お、おまけに正宗さんってば、さりげなく私のお尻も揉み始めるし……！
お尻のお肉を揉みしだかれて、下から容赦なく突き上げられる。
「……っ、ぁ……っ……ん、んー！」
私も、さらなる快感を求めるように自分でも腰を揺らしてしまう。
硬くて熱い肉棒に内側を擦られるのがたまらない。気持ち良くて、もっと、もっと……ってなって、止まらなかった。
「んっ、んっ、んんっ……！」
腰を動かす私を、正宗さんは嬉しそうに見つめている。
その瞳の熱に、またぞくぞくっと背筋が震えて……
「……っ、……ん、ん～っ!!」
私は正宗さんの上で盛大に背中を反らし、絶頂を迎えた。

＊　＊　＊

「はぁ～っ、はあ……っ」

俺の上で絶頂を迎えた千鶴さんは、荒い息を吐きながら力なく倒れ込む。

抱き締めた柔らかい身体。しっとりと汗に濡れた肌と肌が張り付くような感触が、とても心地いい。

こうして繋がったまま、ずっとくっついていたくなる。だが、避妊のことを考えるとそうもいかない。

名残を惜しみつつ、俺はそっと彼女の身体を長座布団の上に倒し、自身を引き抜く。そして避妊具を始末し、新しいものを被せた。

「……も、いっかい……？」

熱に浮かされたような目で俺の行動を見つめていた千鶴さんが、そう尋ねる。

やや掠れた声と舌足らずな物言いが可愛らしくて、俺は笑みを深めて「ええ」と頷いた。

「明日は休みですからね。もう少しお付き合いいただけますか？　奥さん」

「う……、はい……」

千鶴さんは恥ずかしそうに小さく頷き、長座布団に顔を埋めた。

さっきまであんなに積極的だったのに、今は羞恥の方が勝るらしい。

そんな初心なところと、それでもなお俺の欲情を受け入れようとしてくれているところが、どうしようもなく愛おしい。

寝そべっている彼女の頬をそっと撫でる。頬に張り付いた髪を耳にかければ、千鶴さんは俺の手を取って、手の平にちゅ……っと口付けをした。

そして猫が飼い主に甘えるように、すりすりと頬ずりをする。

「千鶴さん……」

甘えたな彼女がたまらなく可愛い。

俺は猫の毛並みを愛でるつもりで、彼女の頭を撫でた。

千鶴さんは満足そうに、されるがまま、俺に身を寄せてくる。

俺はそんな彼女の隣に寝そべって、そっとその身体に手を這わせた。すると、千鶴さんも同じように俺の身体を撫でる。

千鶴さんはどこもかしこも柔らかくて――と言ったら、泣いて怒られる気がするので言えないが――とても触り心地が良い。

今の二人の手つきは、愛撫……というよりは、ただの触れ合いに近い。

けれど、こんなスローペースな触れ合いが、ゆっくりとお互いの心を満たしてくれるような感覚を覚えた。

時折、俺は掠めるみたいに千鶴さんの足の付け根に触れる。そこを撫でられると、彼女の身体はわかりやすくびくっと震え、反応を示す。

それに気を良くしながら、またなんでもない顔で他の場所を撫でる。
すると、千鶴さんも負けじと俺の身体に触れてきた。俺の胸にちゅうっと吸い付いたかと思うと、手を俺の股間に伸ばし、自身を優しく握り込む。思わず吐息を漏らした俺に、千鶴さんは満足気に微笑した。
お互いに一度――千鶴さんは二度だが――絶頂を迎えているからこその余裕もあったのだろう。じゃれあうように、ただ触れたり、キスをしたり、抱き締めたり、時折悪戯をしかけたり。そんな時間を、俺達はゆっくりと楽しんだ。
やがて触れ合いは、お互いの熱をもっと高めるものに変わった。俺は彼女の薄い茂みを撫で、その奥に隠された秘裂に触れる。
そして千鶴さんの手も、俺自身へと伸びた。
ただ撫でられているだけなのに、彼女の手だとこんなにも気持ち良い。
千鶴さんも同様に思ってくれていたらいいと、そう思った。
「正宗さん……」
そろそろ……と、千鶴さんがねだるような視線を俺に向ける。
そうですね。俺もそろそろ、千鶴さんと繋がりたいです。
心の中で答えつつ、彼女の身体を長座布団の上に仰向けに寝かせる。
俺はその上に覆い被さり、自身に手を添え、ゆっくり彼女のナカに挿し入った。
「んあっ……」

「……っ……」
一度繋がり合った蜜壷はまだ柔らかく解れていて、ねっとりと俺を迎え入れてくれた。相変わらず温かくてやや狭いソコは、ぴったりと俺の形になっている。
俺のことしか知らない身体。俺だけの……
それが、愛おしくてしょうがなかった。
その感覚を堪能したくて、ゆっくり、ゆっくり最奥まで自身を沈める。
そうして深い息を吐いてから、少しずつ腰を動かし始めた。
「んっ、んんっ……」
腰を引いて、軽く浅いところを突くように動く。
時折、深いところを激しく穿つために腰を振った。
「……っ、ふぁ……ん、ぁ……っ」
大きな声を上げまいと堪える、彼女の鼻にかかったような吐息が、いっそう興奮を募らせる。
腰を振りながら、千鶴さんの胸や腹に触れた。さんざん触り尽くしたのに、足りない。白くて、熱くて、柔らかい身体に、もっと触れていたい。
彼女の身体から立ち上る、シャンプーの匂いが混じり合った甘い香りにも、情欲が掻き立てられた。
「はっ、はあっ……はあっ……」
だんだんと、息が荒くなってくる。

最初はあったはずの余裕が、今は跡形もない。
自分でも気付かぬうちに愛撫の手が止まり、気付けば獣みたいに激しく腰を振っていた。
千鶴さんはそんな俺を宥めるためか、俺の身体を抱き寄せ、頭や背を撫でる。
こうなってくると、彼女を甘やかすというよりは、俺が甘やかされているような状態だ。
「っ、あ……っん……っ、まさむねさんっ、まさむねさ……っ」
好き勝手に振る舞う俺の欲望を、千鶴さんはそのまま受け止めてくれた。
「……っ、く……」
互いの身体を強く抱き締め合って、共に絶頂を迎える。
「はあ……っ」
すごく、気持ち良かった。
身体だけでなく、心も満たされる。
そんな充足感を、結婚してからずっと、千鶴さんは俺に与えてくれている。
俺の下で快楽の余韻に蕩けている千鶴さんが可愛くて、愛おしくてたまらない。
真っ白い肌がほんのりと赤く染まって、ああ、なんて綺麗なんだろう。
一度は鎮まった情欲が、またむくりと鎌首をもたげる。
「……千鶴さん、もう一回、いいですか？」
繋がり合ったまま三戦目を願えば、千鶴さんはぎょっとした顔をして、それからしばらく考えるそぶりを見せた。そして、「そ、それで最後ですからね」と言って、受け入れてくれた。

彼女の身体に無理を強いているとわかっているのに、つい甘えてしまう。
これじゃあ俺も、優月のことは言えないかもしれないな。

＊　＊　＊

土曜の夜に正宗さんとお話してから（お話だけでは済まなかったものの……。ええ、えらい目に遭いましたよ……）、優月の赤ちゃん言葉には目を瞑って甘やかしてやろう！　と心に決めていたのですが……
なんと翌日、赤ちゃん言葉ブームは呆気なく終わりを迎えたのです。
というのも、その日の午後に、久しぶりに幸村先生と朧さんが遊びに来て下さいましてね。
あ、幸村先生こと幸村真さんは、正宗さんの学生時代のご友人で、現在は同じ私立高校の養護教諭。だから、私は幸村先生と呼ばせてもらっています。
そして水無月朧さんは、そんな幸村先生の同性の恋人！　和服姿がよく似合う中性的な美青年で、日本画家として活躍されています。
お二人は一緒に暮らしていて、時折食事会をしたり飲み会をしたり、一緒に旅行に行ったりと、家族ぐるみの付き合いをさせてもらっている。
そうそう、実は優月の名前は、朧さんから『月』の字をいただいたのですよ。この子を生む時、すごく力になって下さった恩人だから。

そんな縁もあって、幸村先生も朧さんも、優月のことをとても可愛がって下さっている。
優月は特に朧さんにべったり懐いていて、正宗さんが「いつか水無月と結婚すると言い出すんじゃ……」なんて、心配するほどだ。
「ろうちゃんだー！　ろうちゃん、ろうちゃん！　いっちょにあそびまちょ～」
玄関でお二人を迎えた優月は大喜び！
ここしばらく、朧さんは個展の準備があってうちに遊びに来られなかったから、久しぶりの再会が嬉しくてたまらないのだろう。
いつも以上に甘えた声を出して、優月は朧さんに駆け寄った……んだけど。
「なんだその言葉。恥ずかしいな」
朧さんは優月の赤ちゃん言葉に眉を顰め、ズバッと一言。
「!?」
おおう……。優月は目に見えてショックを受けている。
漫画でよくある、「ガーン！」って効果音がぴったりの様子です。
まあねえ……。自分では面白いと思っていたものを、大好きな朧さんに「恥ずかしい」ときっぱり言われたら、そりゃショックで固まっちゃうよねえ。
さて、どうフォローしたものかと、私は優月を見る。
それは一緒にいた正宗さんや幸村先生も同様らしい。二人とも、優月になんと声をかけるべきか、悩んでいるようだった。

「……ろうちゃん」
しかし、そんな大人達の心配をよそに、優月は沈黙ののちキリッとした顔で朧さんを見上げると、改めて口を開く。
「いっしょに、あそびましょう」
赤ちゃん言葉？　何それ知らないけど？　と言わんばかりの顔で、優月は朧さんに手を伸ばしました。
（ぶはっ！）
ちょっと、この子どんだけ朧さんのこと大好きなのよ！　と、それを見ていた私はもう大爆笑です。だって、なんかいつもより気取ってる！　気取ってますよ、この子！
見れば、正宗さんと幸村先生も肩を震わせて笑いを堪えている。
朧さんはというと、きちんと言い直した優月に「よし」と満足気に頷いて、優月を抱っこして家の中へ入っていった。
「しばらく会わない間に、少し重くなったな」
「え～？　おもくないよ～。ろうちゃんのいじわる～」
きゃっきゃっと嬉しそうに笑う優月の声が聞こえてくる。
お前は女子か！　彼氏に体重のことを言われた時の女子か！
相変わらず、朧さんと優月はらぶらぶであまあまです。
そしてこれ以降、優月の赤ちゃん言葉はぴたっと収まったのでした。

みんなでハロウィン

十月三十一日、ハロウィンの夜。

私達親子三人は、とある建物にやってまいりました。ここは、幸村先生と朧さんの愛の巣……もとい、お二人が暮らすマンションです。

「たのしみだねー、おかあさん」

車から降りた優月は、期待を胸にわくわくしております。その手に持っているのは、朧さんから貰ったハロウィンパーティーの招待状。

今月初め、優月は朧さんと幸村先生からこの招待状を貰ったのです。しかも朧さん手作り！　これを受け取った時の優月は大喜びで、リアルに小踊りしてましたよ。それは浮かれたステップでございました。

おまけに今日まで、招待状をお仏壇に飾って毎日拝む始末……ちなみに、我が家ではいただき物をお仏壇に上げる習慣があるので、その影響かな？　と思っています。あの子の中では「良い物を貰ったらお仏壇に！」というルールが出来上がっているようなのです。

招待状には、親子三人でいらして下さいと書かれていました。そして、ハロウィンパーティーということで、仮装して来るようにとの指示も。

仮装の希望を聞いた時、優月が指差したのは、とある絵本のクマさんとウサギさん。

その絵本も朧さんから贈られたもので、優月が今一番気に入っている絵本です。

森でクマさんとウサギさんが仲良く暮らしてる……っていう、ほのぼのストーリー。

（あんまり『ハロウィン』って感じはしないけど……）

せっかくなら優月の希望を叶えましょうということで、正宗さんと優月はクマさん、私はウサギさんのコスプレ……もとい、仮装をしてやってまいりました。

ちなみに優月は、クマさんの着ぐるみ風衣装を纏っています。子ども用の仮装衣装を扱っている通販サイトで見つけたのですよ！　茶色のフリース素材でできていて、ハロウィン後もパジャマとして使えるのが購入の決め手でした。

我が子ながら……めちゃくちゃ可愛いです！　出かける前に、家で何枚も写真に収めちゃいました。ふふふ、正宗さんも自分のスマートフォンで撮影してたんですよ～。ちらっと見たら、待ち受けに設定してました。

そんな正宗さんの衣装は、普通の私服にクマ耳のついたカチューシャです。

優月が着ているようなクマさん着ぐるみの大人用もあったのですが、正宗さんには可愛すぎるというかなんというかで……。いやそれはそれで私的には萌えるし、見たかったんだけど！　正宗さんがこれはちょっと……ってね。そりゃそうだ。

他の衣装だと、あとはガチな着ぐるみくらいしかなかったのですよ……

なので、不器用ながら私が正宗さんのクマ耳を手作りいたしました！　市販のカチューシャに、

作ったクマ耳をくっつけるだけの簡単な出来ですが。
それでも優月はお父さんのクマさん姿に満足らしく、にっこにこしながら正宗さんのクマ耳を見ています。おそろいなのが嬉しいようです。
そして、私も仮装をしているものの……。女性用のウサギさんの仮装衣装ってね、やたらセクシーなのが多かったのですよ！　バニーガール的なやつね。正宗さんには、それでもいいんじゃないかと言われましたが……は、恥ずかしいです。第一、さすがに人様のお宅にお邪魔するのにそんな恰好はまずかろうと思い、ウサ耳カチューシャだけ通販しました。
服は白のウサ耳に合わせた白いワンピースを着て、白いフェイクファーのマフラーを巻いています。
ちなみに私の仮装に、優月はなぜか上から目線で「……うん、うん。かわいいんじゃない？」と言っていました。なんか複雑！
そんなこんなで用意してきたウサ耳を、お二人の部屋の玄関前で装着しました。
え？　ウサ耳を着けて来なかったのかって？　だって、クマ耳はあまり目立たないけれど、ウサ耳は長くて目立つし、見られたらちょっと恥ずかしいじゃないですか！
というわけで、私の仮装は今完成なのです。
「ぼくがっ、ぼくがならすー！」
優月がぴょんぴょん跳ねながら、自分がインターフォンを鳴らす！　と主張しております。が、優月の身長では届かないので、苦笑した正宗さんに抱っこしてもらいました。

「えいっ」
ピンポーンという音が、扉越しにも聞こえてくる。
すると、さして間を置かずに、がちゃりと扉が開いて……
「よお、よく来た――」
「ひょえええええええ!!」
中から朧さんが顔を出した瞬間、優月の悲鳴が響き渡りました。
えっと、なぜかと言いますと、出迎えてくれた朧さんがですね、なんとも凶悪な白いマスクを被り、チェーンソーを持っていたからです。
某日の金曜日で有名なジェイソンさんですね。私と正宗さんは声でわかったので、驚かなかったものの……
ぶっちゃけ、かなり怖いです朧さん！　どうしてそれをチョイスしたのですか!!
「悪い悪い」
「ろうちゃん！」
涙目だった優月は、朧さんがマスクをとって綺麗なお顔を露(あら)わにすると、すぐに笑顔になりました。切り替え早いな。
「それすごいね！　びっくりしたー」
「だろ？　びっくりさせようと思って。怖かったか？」
「ちょっとだけ……。でも、かっこいい」

おいおい優月。頬を赤らめてもじもじしないの。正宗さんが複雑そうな顔で見てるでしょ！
「そっか。お前は可愛いな。クマさんか」
「っ！　ろうちゃん」
感極まったような顔で、ぎゅうっと朧さんに抱きつく優月。
この二人は今日もらぶらぶです。
そんなお出迎えのあと、私達はリビングに通される。
「いらっしゃーい」
出迎えて下さった幸村先生は、髪をポニーテールに結い、忍者服を纏っていた。しかも手で印を結び「ニンニン」とか言ってます。
「まこちゃん！　ニンジャだー！」
某忍者アニメが好きな優月は、喜び勇んで幸村先生に抱きつきました。ちなみに私もこのアニメ、大好きです！
「まこちゃん、まこちゃん、ぶんしんのじゅつ、見せて！」
「あははー。まこちゃんはまだ修行中だから、無理なんだー」
「ヒラ忍者だからな」
くっくと意地悪な笑みを浮かべるのは朧さん。ちなみに、チェーンソーをやたら軽々持っているなあと思ったら、本物そっくりに作った偽物なのだそうです。
「あははっ。ゆーちゃんのクマさんとっても可愛いね！　正宗とちーちゃんも、クマさんとウサギさんなんだ。森の動物親子だね～」
着ぐるみ風衣装を見て笑う幸村先生に、優月は胸を張る。
「ぼくがえらんだんだよっ」
得意気な優月の頭をぽんぽんと撫でながら、幸村先生は「センスいいなー」と笑ってくれました。
「ほわあああああ」
リビングに通されてから十分後。
お洒落なガラステーブルの上に所狭しと並べられたハロウィンディナーに、優月は目をキラッキラさせております。うん、これはすごい。
大興奮の優月に笑いつつ、朧さんが口を開く。
「ウチの板前に洋食の勉強をしていたやつがいて。そいつに今日のことを言ったら、作ってくれた」
なんと！　これ、朧さんのご実家のお店――朧さんのご実家は高級料亭を営んでいます――の板前さんが作ってくれたのですか！
ふあああああ！　私のテンションも上がっておりますよ。美味しそう～!!
サーモンで包んだ手鞠寿司は、海苔で口と目を作ってジャックランタン風の見た目。おお、卵で巻いたお寿司の方は、お化け風に装飾されております！　すごい！
野菜たっぷりのサラダには、お化けの形にくり抜かれた薄いパンがクルトン代わりに載っていま

す。しかも、このサラダにはウズラの卵も入っているのですが、こちらもゴマで目が描かれている上に、切り目が口のようになっていて、可愛いです。

他にも、ジャックランタンみたいに切り込みを入れたトマトをカップにしたグラタンや、髑髏の形をしたポテトフライまで！　ああ～、ローストビーフにパンプキンパイ、パンプキンスープまである～！

こういうハロウィン料理って、可愛くってときめいちゃいますよね～。

ちなみに私が働いているカフェでも、十月はハロウィンフェアでカボチャを使った料理やお菓子を出していたのですよ。スタッフみんなで試作したんだけど、美味しかったし、楽しかったな～。内装もね、ハロウィン仕様に飾り付けしました。

こんな風に、季節の行事を楽しむのってなんかいいよね。

今夜のハロウィンパーティーも、優月だけじゃなく、私もすっごく楽しみにしてたんだ。

「すごいですねえ」

私は改めてテーブルを見て、しみじみ呟く。

「朧がね、張り切っちゃって」

くすっと笑いながら、幸村先生は私のグラスにワイン、正宗さんのグラスにはウーロン茶、そして優月のグラスにはオレンジジュースを注いでくれました。正宗さんは運転手さんなので仕方ないとはいえ、私ばかり飲んで申し訳ないです……！

「おとうさん、おとうさん。すごいねえ、ねえ、たべてもいい？」

「まだ。皆で『いただきます』してからな」

大興奮の優月が、隣に座る正宗さんにそわそわとお伺いを立てる。ちなみに席順は、私、優月、正宗さんで、向かい側に朧さんと幸村先生が座っている。

このお家には優月もよくお邪魔しているから、子ども用の椅子が常備されているのだ。優月はその椅子に座って、「はやくたべたいよー」と料理に熱い視線を送っている。

全員のグラスに飲み物が行き渡って、せっかくだから乾杯しようかという話になった。音頭をとるのは、幸村先生。

「それでは改めまして～、ええっと、ハロウィンの夜に乾杯！」

「はろうぃんのよるにかんぱい！」

優月が大人達の真似をして、グラスを高く掲げる。

そして、そのあとはちゃんと手を合わせて、いただきますと頭を下げた。

私達もいただきます、と手を合わせてから、思い思いにフォークや箸を手にする。

「うまぁー！」

ジャックランタンの手鞠寿司を口いっぱいに頬張って、優月は満足顔。

うんうん、本当にうまぁー！　だねこれ。

「ちなみにそっちの卵の方は、朧が作ったんだよー」

「えっ」

もぐもぐとお寿司を咀嚼していた優月が、幸村先生の言葉を聞き、驚きに目を見開く。そして卵

のお寿司と朧さんを交互に見た。朧さんは少し気恥ずかしいのか、ごにょごにょと喋る。
「……ま、人に作らせたもんばっかりだと、あれかと思って……」
「ろうちゃん……！」
優月は何やら感動しているらしき顔で朧さんを見つめた。……つくづく、カップルみたいだなこの二人。
優月は宝物を扱うようにそっと、自分のお皿に朧さん手製の卵寿司を載せる。でも、すぐには食べずにじいっと眺めて、へへっと笑うばかり。
「……食べないのか？」
「んー、たべちゃうの、えっと、もっとな……じゃなくて、もったいない？　もったいない！」
へへーっと、優月は無邪気に笑ってみせる。よっぽど嬉しかったんだなー。
「……っ。そんなもんくらい、これからいつでも、いくらでも作ってやるよ」
「ほんと？」
「ああ、本当だ」
照れている様子の朧さんと、幸せそうな優月。
うふふふふ～。そんな二人を、私、正宗さん、幸村先生はにこにこしながら見守っております。
正宗さんは、最近は二人のらぶらぶっぷりに寛容になったというか……
もう少し前は、朧さんにヤキモチを焼いたり、優月は父親より朧さんの方が好きなのかって、落ち込んだりしてたっけ。

でもね～、優月は朧さんのことが大好きだけど、それとは別に、ちゃんと正宗さんと私のことを、親として慕ってくれているからね。
幸村先生も、以前はちょっと優月にヤキモチを焼いちゃっていた。だけど、今は優月に優しく笑いかける朧さんを、嬉しそうに見つめている。
たぶん、朧さんの変化を一番喜んでいるのは幸村先生なんだ。幸村先生が朧さんに向ける眼差しには、恋人同士の熱い情愛だけじゃなく、家族に向けるような温かさがある。幸村先生はつくづく情の深い、懐の広い人なんだなあって思うよ。
何より、こんな人に愛される朧さんはとっても幸せ者だと思うの！　ムフフフフフフ!!
腐女子的には、そんな二人の愛情を垣間見ることができて、この上ない幸福……です！
「ありがとう、ろうちゃんっ！　だいすき」
あっ、優月が椅子を下りて朧さんの椅子によじ上り、彼の頬っぺたにちゅっと、ちゅ、ちゅーをかましましたー！
「なっ、優月!?」
「ゆーちゃん!?」
これには二人を温かく見守っていた正宗さんと幸村先生も、目の色を変えます。
ほっぺにちゅーは、ダメみたいです。でも、ほっぺにちゅーでこの反応なら、唇にちゅーだったらどうなるんだろう？　ちょっと考えてニヤニヤしてしまいました、すみません！
二人のことを認めてないわけじゃないけど、あんまりいちゃいちゃされても面白くない親心と恋

人心に、私はほくそ笑んでしまいます。楽しいなあ。
「ありがとうと、だいすきのちゅー、だよ」
しかし、どこでこういうことを覚えてくるんだろうな、この子は……。
「お前な……。こんなのどこで覚えてくるんだ」
呆れつつもちょっと嬉しそうな朧さんが尋ねると、優月はにぱっと笑みを浮かべて言いました。
「おとうさんとおかあさん！」
「ごふっ」
パ、パンプキンスープが気管にっ……
「ほほう」
ああっ、朧さんが意地悪スマイルで私達を見ております！
いやっ、やめて！　いたたまれない！　恥ずかしい!!
そんな親心を知らず、優月はにこにこしながら、「ときどき、こうやってちゅー、してるの」と追い打ちをかけます。やめてえええええ!!

そんなこんなで、ちょっとしたハプニングもあったハロウィンディナーのあと。
お腹いっぱいになった優月は、朧さんと一緒にお絵かきしているうちに、朧さんにころんと寄りかかって眠っていました。
そろそろお暇しなければ、ですね。

正宗さんが眠っている優月を抱き上げて、私が荷物を持つ。
すると幸村先生が、「あっ」っと何かを思い出したように声を上げてから、バスケットを一つ持ってきた。
「すっかり忘れちゃってた。これ、ハロウィンのお菓子」
バスケットの中には、お菓子がたっぷり詰まっています。今日のために朧さんと二人で用意して下さっていたんだって。
でも、楽しく時間を過ごしているうちに、「トリック・オア・トリート」って優月にやらせるのを忘れていたとのこと。
あわわ……。何から何まで本当にありがとうございます。ディナーのあとにはハロウィンケーキまでご馳走になったのに、至れり尽くせりで頭が上がりません。
「こいつのおやつにしてくれ。くれぐれも、一気に全部食べんなって言っておけよ」
そう言うのは朧さん。そうですね。この子ならやりかねない……
「ありがとうございます」
「ああ、優月にはちゃんと言い聞かせておく」
正宗さんと一緒にお二人に頭を下げてから、私は朧さんに声をかける。
「朧さん、よかったらお菓子がなくなる前に遊びに来て下さいね。この子も、朧さんと一緒にお菓子を食べられたら、きっと喜ぶと思います」
その時に改めて、「トリック・オア・トリート」ってやらせてあげてください。

立ち読みサンプルはここまで